

中村 治『14世紀における信仰と自然哲学』について

日下 昭夫

ここに掲載された中村治氏の論文『14世紀における信仰と自然哲学——知についてのニコル・オレームの考えをめぐって——』（以下『論文』と略記）は、中世哲学会1993年度第42回大会での口頭発表『ニコル・オレームにおける信仰と理性の関係』（以下『発表』と略記）を発展させたもので、そのいわば増補・改訂版といったものである。

だが見ての通り、表題には大幅な変更が加えられている*。『論文』では「信仰」と「自然哲学」の関係がひろく14世紀全般にわたって問われているが、『発表』では「信仰」と「理性」の問題が、ニコル・オレームという特定の思想家に限定して論じられていた。とくに「信仰」と「理性」の関係を、オレームの地球自転に関する「思考実験」なるものの考察を通して検討せんとするものであり、『発表』の内容は、表題の変更にも拘わらず、その殆どがそのまま『論文』に再現されている。両者に共通の部分を以下簡単に見ておこう。

地球の自転に関するオレームの「思考実験」なるものを、中村氏は、同じオレームの『天体論註解』第2巻第25章の諸議論に求めている。その「思考実験」によると、地球自転説に有利に事が進んでいるように見うけられる。いかなる経験（experience）も論拠（raison）も、天界の日周運動の真たることを示すことはできないし、地球の日周運動を支持する「論拠」が積極的に示されることもない、というのがその理由である。

しかし、他面、地球自転説をとったかに見えるオレーム（すでに今世紀初頭デュエムがコペルニクスの先駆者と見なしたことは周知の通り）が、敢えて「地球が動き天界が動くのではないことは、信仰のすべての、あるいは多くの箇条と同じくくらいに、あるいはそれ以上に自然理性（raison naturelle）に反するように思われる」ともいっている。地球自転説の放棄を示唆するこの発言を中村氏は特記し、科学史家エドワード・グラントの言葉（「われわれは真の知識を信仰によってのみ持ちうる。自然学的

な世界については、オレームはソクラテスの鞫みに倣って『私は何も知らないということ以外何も知らない』と公言していた。) を引いて、その傍証ともしている。

中村氏によれば、グラントの主張はこうである、——オレームの場合、真の知は信仰によってしか得られず、自然学的世界に関することがらについては何も知られない。理屈の上では地球自転説をとっていたのに、信仰に従って天動説をとったのだった。オレームが「懐疑主義的伝統の後継者」とされる所以である。

グラントに反論したいという中村氏の執念は、『発表』時以来変わらぬところであり、『論文』においても、些かの変更もなしに再現されている。中村氏の主張は一貫して「我々が十分に経験しうる自然学的世界については、确实とまではいかなくとも、蓋然的に知りうる」とオレームは考えていた」というものである。学的な「知」は持ち得ずとも「蓋然的な知は持ち得る」ということであろうが、その知は蓋然的であっても知に変わりはない、ということか、オレームが『テアイテートス篇』を知っていたとしたらどうだったろうか。

『発表』と『論文』を通じて著者の一貫していわんとしている論旨が、以上の通りであるとしても、問題点が多く残されたままであることも事実である。以下その幾つかを指摘し、批判的に検討を加えることで、「コメント」に代えたいと思う。

中村氏の論文は、大方のみるところ、読み易いとはいえない。難解とされる理由のひとつに、キー・ワードを含む、専門用語の自由な（というよりは恐らく自己流の）選択と使用が指摘されよう。加えて、『論文』に登場するキー・ワードは悉く訳語のみで、その原語が書き添えられている例は皆無である（この種の学術論文には異例ともいえよう）ことも理解を困難にしている理由に数えられよう。

『論文』第 1 章の表題に「地球自転説に関するオレームの思考実験」なる表現が見られるが、ここにいう「思考実験」なるものの原語とその正確な意味内容、さらにオレームへの適用の是非をめぐる問題は、ほかならぬ司会者の森田良紀氏によって提起されていたように記憶している。中村氏によれば、オレームの『天体論註解』第 2 巻第 25 章に見られる幾つかの「議論・論拠」(raisons), 「説得・信念」(persuasions), 「議論」(arguments), 「意見・見解」(opinions) のほか、「経験」(experience) も一括して「思考実験」なる表現の下に統合されるというのであろうか。そうした表現は、古来、いわゆる「仮説」(hypostasis) を形成する「論拠」(rationes) ないし

「論議」(argumenta)をいうのであり、その正体は「弁証論的推論」(syllogismus dialecticus)に他ならない。「弁証論的推論」といえば、「通念」(endoxa)から出発して推論する推論のことであり、「論証」(apodeixis)とはあくまでも区別される。

「思考実験」を「仮説」(hypostasis)と言い換えてみる。そしてその「仮説」——たとえば天動説とか地動説といった——を天文学者が問題にするとき、「通念」という蓋然的な知を問題にする弁証論者の立場と軌を一にするといつてよく、その点、すでにトマス・アクィナスの明言するところでもあった。

問題は、もろもろの仮説からいかにして蓋然性の高い立場に達するかにあり、そのための「論拠」(中村氏の表現を以てすれば「理屈」)の応酬が、「現象を救う」(salvare apparentia)を最終的に目指して繰り返されてきたのではなかったろうか。

地球の自転をめぐるオレームの議論は、ヘレニズム期のヒッパルコス、サモスのアリスタルコスに見られる諸論拠から大幅に前進したものとは筆者には思えない。それはともかく、オレームは、中村氏自身認めているように、「天界のことにせよ地上界のことにせよ、観察をして、そこから得られる事実に注意を払うというようなこと」はせず、「書物で読んだものを自分で見たかのように書いたようである。」——そうした事態を取って「思考実験」なるタームで表現された中村氏の意図をいったいどのように考えたものだろうか。

オレームの地球自転に関する「思考実験」は、その考察を通して「信仰」と「理性」の関係を解明せんがためのものであった。「信仰」と「理性」の関係に焦点を絞って、両者の接点そのものを探し求めようとした。容易にそれが見えてこなかったというのが実情で、「科学と神学の間の長い相互関係においては、相対的に穏やかな時代であった(グラント)」がゆえかとも思われた。しかしもしそうなら、何故に「14世紀」で「オレーム」なのか、何故に殊更「信仰」と「理性」なのか、がここに改めて問われなくてはならないところである。——こうした問題をめぐっては、口頭発表時に活発な質疑応答と熱のこもった討論があった。

筆者としてはここで、中村氏の「信仰」の問題をめぐるの発言を取り上げてみたい。長くなるが氏の文章をそのまま引用させていただく。

「オレームは、『天界が動き地球が動くのではない』と断言せず、地球が動くのではないと『信じる』と言っていることに注意したい。彼は『天界が動き地球が動くの

ではない』ということが確実であると主張しているのではなく、どちらかと言えば『天界が動き地球が動くのではない』と考えたいと言っているのである。そしてそれは、地球が動き天界が動くのではないことが、信仰のすべての、あるいは多くの箇条以上に自然理性に反すると彼が考えていたのなら、何ら不自然なこととは思われないのである。」

この文章は『発表』、『論文』のいずれにも何の変更も加えられずに見出される。しかし筆者が問題にしたいのは、「信仰」の、ここでの意味内容であって、それ以上のものではない。「天界が動くといずれの人も主張する」とオレームは言っているが、「いずれの人も主張する」を、中村氏は「世論」と言い換え、「天界が動くのではなく地球が動くのだ、ということは信仰のすべて、あるいは多くの箇条と同じ程度、ないしはそれ以上に、自然理性 (raison naturelle) に反するように思われる」というオレームの言葉によって、「信仰」＝「世論」がいわば補強されているのである。「信仰」が「世論」から更に「常識」に置き換えられ、天動説か地動説かの問題に照らしてこれを見る限り、天動説こそが「信仰」であり「世論」であり「常識」ということになる、というのが中村氏の見解であるように思われる。

そうした事態がオレームに即して十分確認できれば、極めて興味のある線が見えてくるように筆者には思えるのである。「信仰」(faith)と「信念」(belief)が微妙に関わり合うほか、「世論」と「常識」を、アリストテレスのいわゆる *endoxa* とか *pisteis* との関係において見てみたい気もするからである。

冒頭で触れたように、中村氏の『論文』の表題と、『発表』の表題とは大きな変更が見られる。内容の変更はしかし、予想に反してそれほど大きいものではないように思う。中村氏は『発表』後の或る日、近代科学との比較において、中世自然哲学の特徴を浮き彫りにすることが、オレームの学問論・科学論理解の重要な鍵と判断され、それを新たに『論文』の「序」として書き下ろされた。表題として「14世紀」を前面に出されたのも同じ理由に基づくものと思われる。同じく表題において「理性」の代わりに「自然哲学」が置かれているが、恐らくそれは、「宇宙論」が「自然哲学」を経て「形而上学」ならびに「神学」の領域にも関わっているという中村氏の考えをより直截に示さんがためのものであろう。「宇宙論」の「形而上学」、「神学」への通路を「自然哲学」に置いて論じようとする意図があつたのことと思う。だが残念ながら、

筆者には、それが成功しているとはどうしても思えない。

なお副題として「知についてのニコル・オレームの考えをめぐって」とあり、第3章がそれに当てられているが、これまた問題の多い論述と言わざるをえない。

ちなみに『論文』はかなり冗長で繰り返しが多く、むしろ『発表』のほうがコンパクトに纏まっていたように思う。

* その変更の理由に関しては、残念ながら一言の説明も釈明もなされていない。『論文』の立論そのものが答えてくれるものと期待して読み進めて行かなくてはならないのだろうか。期待が叶えられるかどうかはともかく、表題の変更に関しては、その理由を、読者には論文冒頭で説明しておくのが著者の義務であろう。

* * *

討論報告（司会者）

森田 良紀

中村治氏が先ず自ら提示した問題についてペーパーを読み、引続いてコメントーターの日下昭夫氏が立ち、発表された中村氏のペーパーについて幾つかの問題点及び疑問を述べて両者のあいだに熱のこもった討論、やり取りがなされた。会場からも四人の質問者が次々に立って質問し、提題は色々な課題や疑問を孕みながら、却ってそのために会場は熱を帯びたのではないか、と思われる。

次に、私は自分の目を通して私なりに理解した提題の問題点や疑問点について、私の考えを不確かさは不確かなまま、疑問は疑問のままに私の考えを正直に自由に述べることにしたい。それに先立って私はそもそもいつニコル・オレームの名を知りその名前を目にしたか、を述べて置きたい。なぜなら今でもオレームの名は誰もが知っているわけではないのだから。私がオレームの名を目にしたのは、もう随分以前の事であるが、A・コイレ著の『ガリレイ研究』¹⁾を読んだ時であった。開巻して殆ど冒頭ちかくにブリダンの名があり、次にオレームの名前が続いていた。いかに怠惰な私でもブリダンの名はロバの比喩と結びつけて知っていた。しかしオレームはこの時はじめて目にした名前であった。そうして、これをきっかけにしてオレームの三角形なるも